



第17号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087：TEL. 0566-41-8522

：FAX. 0566-41-7761



「漱石門下の寄せ書き」

写真撮影 磯村 静波 氏(安城市)

寄書者 岩野泡鳴、津田青楓、小林古峽、安倍能成、生田長江、森田草平、万造寺齊、伊藤証信、阿部次郎、
堺利彦(しづ六)、鈴木三重吉、和辻哲郎、小宮豊隆、岡田耕三、植竹喜四郎

明治9年(1876)三重県久米村で生まれた伊藤証信は、明治から昭和初期日本の思想界に影響を与えた思想家です。真宗大学で清沢満之に師事し、明治38年(1905)突如靈感に打たれて無我の愛を悟り、それからは東京郊外巣鴨村の大日堂に移り住み、そこを「無我苑」としました。雑誌『無我愛』を創刊し無我愛の活動を続け、当時の知識人に衝撃を与えました。三河西端に移ったのは証信50歳の、大正14年(1925)で、土地の青年たちに西洋哲学や仏教、ドイツ語を教えながら著書『無我愛の哲学』などの執筆をしていましたが、昭和9年(1934)西端に「無我苑」を新築して無我愛の活動をつづけました。証信が生涯を閉じたのは88歳の昭和38年(1963)、西端無我苑の地でした。

平成14年は証信遺族より土地、建物、遺品を寄贈されたのを基に建設した「碧南市哲学たいけん村無我苑」の開村10年という記念すべき年なので、瞑想回廊で展示を企画し伊藤証信の無我苑(西端)建設から哲学たいけん村無我苑としての歩みを振り返ってみたいと思います。(鳥居)

瞑想回廊第十八回企画展示

「無我愛」——伊藤証信の遺品

平成十四年六月十一日(火)～八月十八日(日)

武者小路 実篤 (むしゃのこうじ さねあつ)

1885～1976

大正・昭和時代の小説家、劇作家、詩人、画家。明治18年東京麴町に子爵実世・秋子（なるこ）の末子として生まれました。学習院高等科に学び、東京帝国大学を1年で中退。中等科最上級の夏、『聖書』ならびにトルストイの『我宗教』『我懺悔』を読み、自己の生き方を問う契機を持ちます。他を愛するにはまず己を愛することを知らねばならないという立場、自己肯定への道から、自己の生長と拡充を求め、主体的な生の創造を目指す姿勢を鮮明にし、志賀直哉、柳宗悦らと『白樺』を創刊、精力的な執筆活動をします。自己を生かし、人間苦の抜本的な救済を命じる「自然」の意志を深く想うようになり、個と全体との調和した理想社会の地上における実現を課題とするようになりました。この思想が宮崎県児湯郡木城村に大正7年「新しき村」として具現し現在もその活動が続いています。証信はこの村を訪れており（大正10年）、互いに交流がありました。「新しき村」はいわゆる「共同生活体」で、共産共生の状況は現在もかわらず、農業を主とし、養鶏、稲作、畑作、椎茸、茶の栽培が村の生計の基盤です。他にパンの製造、陶芸創作の仕事もし、一般社会の市場にも出ているということです。

平塚 らいちょう (ひらつか らいちょう)

1886～1971

大正・昭和期の社会運動家。日本最初の女性文芸誌『青鞥』を創刊。日本の女性運動の第一人者であり、女性だけの手によって雑誌を発刊し当時の先進的な女性を組織し、言論、とりわけ文章の力によって時代の壁をこじあげた優れたジャーナリスト。あさ子夫人は青鞥社が設立された頃にらいちょう女史を訪ね、婦人解放運動に協力しています。



平塚らいてう

女史は、証信の死後、「柔軟な魂の自由宗教者 伊藤証信先生とあさ子夫人を永遠に記念する」と墨書した書を二代苑主伊藤慶爾氏に贈っています。

市川房枝、奥むめおらと新婦人協会婦人参政運動を展開、戦後は平和運動に力を発揮します。

(言葉)

「元始、女性は太陽であった」

『青鞥』より

森 信三 (もり しんぞう)

1896～1992

愛知県に生れます。京都大学哲学科大学院を卒業、のち天王寺師範教諭を13年間、満州建国大学教授時代に終戦を迎え帰国します。全国を教育講演行脚し、執筆活動、教育にたづさわりました。証信とは昭和8年にカントの哲学及び、俱舎、唯識論の共同研究を始めています。社団法人「実践人の家」創業者。

杉浦 冷石 (すぎうら れいせき)

1896～1977

西端の杉浦亀吉の三男として生まれました。学問を好み、独学で教員資格を取り、1913年、新川小学校に奉職。その後、大阪朝日新聞に勤務、大阪毎日新聞、名古屋新聞、名古屋毎日新聞に迎えられます。その間、新聞の文芸欄を担当、俳句への造詣を深めていきました。1924年、同志と俳句誌『野火』を創刊、その後、地元の俳人永井寛水と交流、俳句誌『アヲミ』に投稿、俳句の本流であるホトトギス派の同人に参画するようになりました。1948年、西端に帰郷、俳句誌『白魚火』（しらおび）を謄写版刷りで発刊、中部地区を中心に全国の有志が冷石の下に集まりました。俳句誌『白桃』を創刊。冷石は「竜灯団」と称する青年求道者グループの一員として、証信を三河西端に迎えました。

市民図書館は氏の出版した俳句集『白魚火』、『榊鬼』、哲学的な随想集『俳談・杉浦冷石』を蔵書としています。

(言葉)

「白魚火や杭につもりし夜の雪」

応仁寺 句碑

写真：日本女性肖像大事典（日本図書センター1995年版）より



瞑想回廊第18回企画展示

「無我愛 — 伊藤証信の遺品」

平成14年6月11日(火)～8月18日(日)

伊藤証信の西端無我苑は、様々な人に支えられ、その形跡は翁の遺品の中に見ることができます。以下そうした方の一部を紹介いたします。

与謝野 晶子 (よさの あきこ)

1878～1942

明治～昭和期の代表的歌人。堺市の菓子商に生れます。与謝野鉄幹に傾倒し、結婚。雑誌『明星』の中心的存在として活躍。青春の情熱と人間賛歌を歌いあげた処女歌集『みだれ髪』、反戦的な詩「君死にたまふことなかれ」で知られ、浪漫的心情と作歌への情熱を生涯持ち続けました。

文学のみならず、教育・婦人・社会問題に関わる活動をし、無我愛の思想の共鳴者でした。女史は証信に度々掛軸を贈っていました。

(言葉)

「若さ」の前に不可能もなければ、陰影もない、それは一切を突破する力であり、一切を明るくする太陽である『愛の創作』(大正12年)より



与謝野晶子

中村 久子 (なかむら ひさこ)

1897～1968

岐阜県の畳職人の家に生まれました。生後間もなく突発性脱疽(だっそ)(肉が焼け骨が腐る病気)にかかり両手首と、左足はふくらはぎから、右足は踵から切断。口で字を書き、裁縫ができるようになり、自ら求めて見世物小屋の芸人になりました。昭和9年4月半ば、愛知県西端の蓮如上人法要で興行を打っていたある日、伊藤証

信夫人、あさ子と出会います。久子の演技を見たあさ子は、ぼろぼろ涙をこぼしたということです。「人間のほんとうの生き方とは何か」という求道心を抱いていた久子と、「無我愛」の実践生活をするあさ子—



中村 久子

2人の出会いをきっかけに、久子は新しい生き方を追求して学園や施設への慰問を積極的にはじめ、講演も引き受けるようになります。

(言葉)

「障害者だから夜が明けてもまだ床の中に寝ていてよい、ご飯の仕度をしてくださるのをただ食べればよいではありません。皆と一緒に起きて、各自がそれぞれの成し得られることをして、一緒に明るい食卓につくことが、福祉法を真に生かして行くものではないか、と思うのであります。」

『生きる力を求めて』序文より

暁鳥 敏 (あけがらす はや)

1877～1954

明治から昭和時代にかけての仏教思想家、仏教伝道者。石川県石川郡出城村字北安田(松任市)真宗大谷派明達寺に生まれます。清沢満之を中心とした東本願寺の宗門革新運動に加わるなど、生涯を精神主義に基づく仏教伝導に捧げ、日本の思想界に大きな足跡を残しました。

(言葉)

「十億の人に十億の母あらむも わが母にまさる母ありなむや」

明達寺 歌碑

第三回
伊藤証信翁にまつわる
思い出(座談会)

これは平成十三年三月二十九日(木)に、無我苑研修道場で収録されたものです。

座談会 参加者 岡島 良平 (お)

榊原 純治郎 (さ)

杉浦 元 (す)

(五十音順)

(お) 無我苑ができたのが昭和九年か。

(す) 完成のお祝いがあったのは、昭和十年。

(司会) 西端小学校で、記念会がありましたね。

(す) そうだよ、大勢でやった。寄付を皆で出し合って。

話とはびますけれど、証信先生御夫妻も亡くなって、まち子さんもご主人の慶爾さんも、豊橋の病院に入院せられたので、まちさんが、小学校の先生をやっておられた(養女の)あけみさんに相談されて、無我苑のものを全部碧南市に寄付せられた。それでこの哲学たいけん村ができることになり、県から、二億円の補助をうけ、総額十二億円で、今の無我苑ができた。ただ、あんまりよく作ってしまわれたものだから、まちさんが、昔のイメージが壊れてしまった、と。

それで僕は、証信先生から「俺の命だと思ってくれ」と言われて頂い

た紀元二千六百年の掛軸を無我苑に寄付した。当時はね、それから六六十年引くと、今の西暦の年号になる、大事にしてくださいよということ。それと、栄願寺から譲り受けたあき子さんの黒染の抹茶茶碗も寄付した。まちさんが全部寄付せられたのなら、私は家宝としてとっておいたものを寄付しようと思った。

(さ) 「慶爾」と書いて、「きょうじ」と読むですか

(す) お寺さんですから。

(さ) 証信先生が東京においでの際から安藤(現慶)さんとは親しかった。

だから、竜灯団に証信先生の話をさされ、その安藤さんの要請を受けて、証信先生がここに来られた。

証信先生がお亡くなりになってですね、二年目のときでした。慶爾さんがね「私は、茶道、お茶のことを研究したい。一、二年中国に行つてそれから京都で研究して本にまとめたい」と言つて私に話された。ところが、その目的を達成せずに亡くなつてしまい、私は、非常に惜しいと思つておるのです。

(す) そういうことで、慶爾さんは中国やら韓国やらにお行きになつて、日本だけでは足りない、随分研究されたんです。

お勤めは、豊橋の愛大でしたか。

(さ) そうです。定年でやめられた。

(す) 娘さんのあけみさんは、代用教員の資格があったです。それで、西端に勤められて。

(さ) その時にすな、勤めることが決まつて、あき子さんが喜ばれて、それじゃ、榊原さんと呼んで、就任の挨拶の言葉を書いてもらえ、と。それで私は三時間かかつて、西端の代用教員就任の言葉を考えて、とそういうことがありました。

今です、無我苑が茶道の中心になつておりました、証信夫妻がさぞかし喜んでおられると思つてますよ。

慶爾さんが、茶道を研究したい、と言つたのは偶然ではないのです。

あき子さんが、挽く前のお茶の葉を自分で見て、これはこんな味がする、これはこんな味がする、これはこんな味がする、これが一番いい、とかいうことで自分で挽いて飲んで、いろいろ研究してみえたです。

(す) あき子さんは自分で黒染も作られたので、地下で喜んでおられる、私たちが無我苑でこうしてお茶会をするということについて。

年始にいろんな人が来られた。与謝野晶子さんも、河上肇さんもよく来られた。

(さ) 昭和六年から十年頃、秋の夜、鷺塚の公会堂で証信先生とあき子さんの講演をお願いしたんです。で、送り迎えをハイヤーです、と言つたら、そんな必要はない、リヤカーで、秋は寒くなるから、あき子さんが証信さんに暖かい布をかぶせられた。そういう風です。損得一切なしです。

(さ) 与謝野晶子さんがね、毎年半切に

ね、お軸になるように、自作の短歌を書いて十二枚送つてくるんです、ということ、大変失礼な話だが、経済援助のつもりだと私は思つたです。でも、決して売らないです。私も一枚貰つて表装して無我苑にだしましたけど。いろいろな名士が来られた。その人たちのものなら短冊にしても皆売れるけれど、決して売らない。そう言つちゃ失礼ですが、経済的に豊かだといえませんが、夕ご飯をご馳走いただいたりも、実質的にはあき子さんの腕前ですばらしい味をつけたご馳走でね、肉だとか魚だとかいうことは、あまりなかったですよ。誠心誠意で人を歓待されましたから、人は皆喜んで遠慮せず食事して、またあき子さんはそれを喜んでなされたです。

(司会) あき子さんはお生れが裕福な方だったと思いますが。

(さ) 歴代、医者家で、六歳くらいのときに、一週間のうちに禿げになつちゃつて。医者であつてもそれをどうすることもできない、申し訳ない、申し訳ないと言つて、お茶、生け花など女のやることは全部師匠になる資格をとつてしまわれたです。ですから、書道でも何でも素晴らしいです。それでもって生活できるだけのことをお父さんは責任を持って仕込まれたんです。

